

(第3種郵便物認可)

環境美化に 息の長い活動

奈良のグループに「緑の都市賞」奨励賞

都市緑化基金が主催し、樹木や花の緑を用いて都市環境の改善や景観の向上に取り組み、その成果を上げている市民団体などを顕彰する、第24回「緑の都市賞」奨励賞を奈良市の「秋篠川源流を愛し育てる会」＝芦田一彦会長(67)＝が受賞した。

植樹した桜の前で、左から芦田一彦会長と橋本哲夫事務局長、石山英勝さん＝奈良市中山町2丁目の秋篠川



「秋篠川源流を愛し育てる会」

里親制度で桜を植樹

同会は登美ヶ丘カトリッククラブ走遊部のメンバーが中心となって平成八年七月に発足。ちょうどそのころ、同十年の奈良市制百周年に向け、市が市民から記念イベントのアイデアを公募していた。地域を流れる秋篠川の沿岸に桜があればという思いから、桜の植樹を思い立ち、採用された。これが会の活動のスタートとなった。

ただ植樹するだけではなく、たぐさんの人にすとかかわってもらえるようにと里親制度を取り入れ、人間と桜の寿命を重ね合わせ、五十一年の計画展覧を掲げた。その結果、地域を中心とし、約十家族と四十一団体が参加し、約十本の秋篠川沿岸に百五十一本の桜を植えた。それぞれの桜について、里親の名前とメッセージが記録されている。

現在、会はさまざまな基金からの助成金を活動資金とし、月一回の川の清掃や、四月の「秋篠川燈火夜桜祭」、里親の集い、自然観察会など川を中心とした活動を展開している。芦田会長は「川に関心を持ってもらうために桜を植えたが、自分たちの川だから大切にしよう、いい場所にしていこうと協力してくれるようになった。こうやって地域の人たちと川を通して交流できるのはいいこと」と話す。

同会の橋本哲夫事務局長(67)は「今後は一層秋篠川をコミュニティの中心にし、桜だけではなく写生会を開催し、その作品を屋外ギャラリーとして沿岸に展示してみたり、ホテルの観察会を実施してみたい」と展望を持っている。